

# 背徳の兄妹

東雲かおる

## 第一章

### 「安奈の場合」

涼は自室のドアを開け、壁際のスイッチを入れた。

オフホワイトに統一されたインテリアが浮かび上がる。

十七階建て高級マンションの最上階。早くに夫を亡くした涼の母が、クラブを経営して手に入れたものだ。ここに涼は母と妹の三人で暮らしている。

もともと専業主婦だった母は、二人の子供を抱えたまま一家の大黒柱を失い、途方にくれる間もなく水商売の道に足を踏み入れた。それが技術も特技も持たない彼女にとって、収入を得る一番の早道だったからだ。

「おまえはいつもトロいからなあ、まあ、そこがかわいいんだけど」と夫に言われていた彼女が、果たしてどこまでやっていけるものだろうかと、周囲の大人たちが危ぶむ中、不思議に多くの客を味方につけいつのまにか店を一軒構えるほどになってしまった。

隠れた才能があったのかもしれない。運がよかったのかもしれない。あるいはいいスポンサーが見ついたのかもしれない。理由はともあれ親

子の生活を守る城として、一般サラリーマン家庭では考えられない家を手に入れた。そしてその生活基盤のもとに涼たちが日々の生活を繰り広げている。

南に開けた窓からは、繁華街のにぎやかな明かりが一望できる。一等地の割に静かなのは、周囲を凌駕する高さのおかげだろう。スモークの窓ガラスはこのマンションに最初から設定されているもので、外の景色はよく見えるが、逆に外から見るとほとんど真っ黒にしか見えない特殊なものだ。

涼のあとから末次安奈が部屋へ滑り込んだ。

黒のタイトなミニスカートから、黒いストッキングに包まれた長い脚が伸びていた。上半身は白のブラウス。その上から黒のジャケットを羽織っている。ゆるくウエーブのかかった黒髪が、かるやかに背中へ垂れていた。

安奈は慣れた様子で部屋の中を突っ切ると、窓際のソファに腰を下ろした。それを見て涼はドアノブのノッチを押し、カギをロックした。そして部屋の中央のテーブルに近づき、リモコンを取り上げた。あまり大きくない音量で、クラシックのピアノ曲が流れ始める。

安奈はジャケットを脱いでソファの背もたれにかけ、立ち上がって涼に近づくとその足元にひざまづいた。

ジーンズの上から涼の股間をやわらかくなぜ、やがて静かにジッパ―をおろす。ジーンズの中に手を潜り込ませ、頬ずりしながらゆっくりとマッサージュする。

涼は安奈のするがままに身を任せながら、カッターシャツの胸ポケットからたばこを取り出した。テーブルの上のライターで火をつける。ゆつくりと煙を吸い込み、ニコチンを灰の中に行き渡らせた。

唇の端にたばこをくわえ、カッターシャツのボタンをはずし始める。たばこの先端から昇る紫煙が中に漂い、煙たそうに目を細める。

やがてカッターシャツを脱ぎ捨てると、ジーンズのベルトとMボタンをはずした。安奈がジーンズをずり下げていく。